

2023年1月29日（顕現後第4主日、A年）

## 牧師メッセージ

「幸い」

（マタイによる福音書 5:1-12）

司祭ヨセフ太田信三

今日はいわゆる「山上の説教」の箇所が読まれます。詩編2：12「いかに幸いなことか 主を避けどころとする人はすべて」とあるように、旧約聖書の伝統で「幸い」とは、神と人との関係のなかで起こされることです。そのような前提抜きにこの箇所を読むなら、ただの現実離れした精神論、楽観論と捉えられかねないかもしれません。神との関係のなかでこそ、わたしたちには想像も及ばぬ「幸い」が実現します。

「幸い」の祝福はどのような人にもたらされるのでしょうか。3節の「貧しい者たち」と5節の「柔和な者たち」は、同じヘブライ語に辿り着くと言われています。それは「背を曲げる」というヘブライ語で、富や人に頼ることができず、たとえば経済的な貧しさのなかでも、ひたすら神により頼む貧しい人をも意味します。さらに10節には、「迫害されている者たち」とあります。これらを合わせると、今迫害のなかで悲しみ（4節）、抑圧のなかで神の前に背を曲げ（5節）、神の正しさ、救いを待ち望む（6節）人々に幸いがある、そのようななかでも、神にのみ頼り、柔軟に耐える人々には、神からの幸いがある、と主イエスは語っています。

続いて7～10節では、迫害、抑圧の中にあっても、抑圧する者を憐れみ、彼らとの間に平和を実現しようとする人は幸いである、と主イエスは語ります。「憐れみ深い者」とは、他者を赦す心を持つ人のこと、8節の「清い」は思いと言葉と行いとが一つであること、つまり日々の生活や行いにおいて二心の無い人のことだと言えます。このことから、他者を愛し、ただ一つ信じる者が「平和を造る者」であり、幸いな人だということとです。

11節からは、言うなれば、励ましの箇所です。なぜなら、ここから語りかけが「その人たち」ではなく、「あなたがたは幸い」だと変わるからです。主イエスが励ます、「あなたがた」とは誰かといえば、まず、当時迫害に苦しんでいたマタイによる福音書著者が属していたクリスチャン共同体です。そして同時に、困難な状況にあるすべての弟子たちです。主イエスの弟子とは、人や自分の価値観に固執するものではなく、日々、神にのみ頼り、柔軟に耐える人々です。そのような人々がこの世に平和を造り出すのであり、幸いな人です。そのためには、圧迫されても耐え、貧しく生きて、謙遜を失わないようにしなければなりません。その道を歩まれた方こそ、主イエスでした。主イエスはさまざまな圧迫にあっても、それを耐え忍び、敵を愛し、彼らとの平和を実現するために十字架に登りました。わたしたちは、自分の力だけでは主イエスように歩むことはできません。しかしだからこそ、「幸い」と言われる主イエスの励ましを受け取ることができるのだと思います。主イエスの背中を仰ぎつつ、主イエスからの励ましに生かされながら、幸いなる道を歩んで行くことができますように。